

先週の礼拝メッセージ(2021年8月22日) ベン牧師

「敵意は葬られた」 エフェソの信徒への手紙 2:14-18

パウロがエフェソへの手紙を書いた時代、ユダヤ人は、自分たちが神に選ばれた民であり、異邦人(ユダヤ人以外)は、神とは関係ない民と位置づけて、異邦人を見下げていました。そのような態度のために、ユダヤ人は他の民族から嫌われていました。さらに、しっかりした教育を受け商売上手な彼らを、他の民族は妬んでもいました。そんな両者にある「敵意」とは、単なる感情のもつれとかよりも、はるかに根深いもので、社会的・宗教的背景を持ったものでした。エフェソの町でも同じような敵意が両者にあったことでしょう。



しかし、一步教会に入れば、そこにはユダヤ人も異邦人もなく、共に主を礼拝し、愛餐の時を持ち、主にあって愛し合い、受け入れあっている姿がありました。なぜそのようなことができるのか、その理由を記しているのが今日の箇所です。

「十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。」(16節)

私たちの罪を十字架の上で負ってくださったイエス様は、その罪から派生する、敵意、病、自己中心など、一切のものを一緒に負ってくださったのです。ですから、先週お話ししたように、以前は神の民ではなく、希望もなかった異邦人が、救われて神の民の約束を与えられ、教会に加えられたことによって、ユダヤ人クリスチャンも異邦人クリスチャンも、同じ神の民となり、彼らの間にあった敵意は、もう十字架の上で処分されたのです。

パウロは、この十字架の恵みを語った上で、さらに、その恵みを受けている教会は、それに相応しく歩みましょうと勧めています。クリスチャンとされたのに、古い価値観にとらわれ、教会の中で兄弟姉

妹を見下げたり、裁いたり、壁を作ったりしてはいけなくと強く語るのです。

これは現代の教会にも通じるのではないのでしょうか。

敵意はすでに十字架によって葬られているのです。葬られたらもう二度と出てこないはずですが、それなのに、主が導いてくださった教会を、兄弟姉妹を、愛せないで裁いてしまう、教会を去ってしまう、そういうことは主が悲しまれているのではないのでしょうか。

不完全な人間の集まりである教会に、全く問題がないということはありません。だからこそ、赦し合いなさい、愛し合いなさいというみことばに従えるかが試されるのではないのでしょうか。

主に前に出て行く時は、ありのままに出て行きましょう。欠けがあっても足りなくても、取り繕ったり、隠したりする必要はありません。ですから、もしほかの人を愛せないということがあったとしても、主はそのままの私を受け入れてくださいます。その上で、主が導かれる、兄弟姉妹を愛し受け入れ合うという、主に喜ばれる私のあるべき姿に近づきましょう、私たちは成長させていただくのです。

私たちはキリストにあって一人の新しい人、一つの体とされているのです。(15、16節)

根深い敵意があったユダヤ人と異邦人が、キリストにあってひとつとされたように、私たちも、教会という一つに体に属するものとして、お互いを認め、もし、他の人の欠点や間違いが見えたなら、愛をもって心からとりなし祈るべきです。

敵意は十字架によって葬られたのです。

私たちは、一人一人が神の前にへりくだり、愛によって築き上げられる教会として、整えられていきましょう。

